
チョコレートメキシコ

大山マルティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコレートメキシコ

【Nコード】

N2117G

【作者名】

大山マルティ

【あらすじ】

朝はうるさいから嫌いだ。頭がぼーっとしてる様な気がするが、これは低血圧のフリ。毎朝ご飯と味噌汁をガッツリ食べる。たぶん僕は胃腸が頑丈なのだろう。

朝はうるさいから嫌いだ。

頭がぼーっとしてる様な気がするが、これは低血圧のフリ。
毎朝ご飯と味噌汁をガッツリ食べる。たぶん僕は胃腸が頑丈なのだろう。

いつも通り学校へと向かう。

ああ僕はほんとに普通の人間だ！

父親は普通のサラリーマンだし、母親は専業主婦。兄は普通の大学生だし、僕は普通の高校生だ。

残念ながら問題は何一つない。

——そして、今日も当たり前のように学校に着いた。

「おい、聞いたか？」

加藤の声はでかい。

「今日の体育、サッカーだってよ！」

柔道部の加藤は体もでかい。おまけにいつもテンションが高い。

「今日こそシュート決めてやる！」

一人でしゃべり続ける加藤。

凄くどうでもいいんですけど……。

加藤は隣の席のヤツにもでかい声で同じ話をしている。

「おい、お前寝癖ついてるぞ。
誰かが僕の頭を叩く。」

「えっ、あっ、みやっ、おっ！」

「反応キモッ！」
ミヤマが笑いながら言う。

ミヤマは同じ中学出身の友達だ。ちなみに自己チュー。

手で後頭部を触ってみると、確かに髪の毛が立ってる様な感じがする。

「まあまあ。そんなことより、今日ヒマだろ？」
ミヤマが続ける。

「えっ、まあ。ヒマと言えばヒマだけど……。」

「じゃあ、ちょっと付き合え。」

何故かミヤマはいつも強気だ。

「いや、でも。何？」

「いいから、いいから。来ればわかるから。」

こいつはほんとに……。

「あー、早くサッカーしてえ!!」

…加藤くん、そろそろ黙ってくれないか。

授業が終わり放課後になると、ミヤマが嬉しそうな顔をしてやってきた。

「じゃあ行きますか！」

「いや、どこに？」

「いいから黙ってついてこい！」

… なんとという亭主関白。

僕はミヤマに連れられて自転車で河川敷にきた。

「こんなトコに連れてきて、なに？」

僕はミヤマに聞いてみた。

「んーと。そのー、俺は毎晩このあたりで素振りをしてるんだけど…。」

「素振りって、野球部やめたのに？」

ちなみにミヤマは、高校生になると野球部に入ってすぐにやめた。上下関係というか体育会系のノリが嫌だったらしい。（ちなみに僕はずっと帰宅部です。）

「うん。いや、やめたけど昔からのクセというか、習慣というか。」

お前にはわかんないかもしれないけど…。」

「へえー。」

確かによくわからない。

「いや、まあ、素振りの話はどうでもよくて…。」

「でも、それって無駄な努力じゃね？」

「だから……。いや、その話はいいから。置いて。」

「ふーん。まあいいけど…。で？」

「えーつと。ここだ、ここ。」

ミヤマは橋の下で自転車を止めた。

「見てみ。あそこんところにガラクタというか、ゴミがいっぱいある
だろ？」

ミヤマが指した先には確かにゴミが山積みになっていた。

「とりあえず、あそこ見てきてくれ。」

「……？」

「いいから。見に行けばわかるから。」

僕はミヤマに言われるがまま、自転車を降りてゴミの山に近づいた。

そこには色々なモノがあつた。
傘、テレビ、タイヤ、エロ本、足…。

おっ！エロ本！……ん？

…足？あし？足！

「うわっ！」

「あはははっ！」

……マ、マネキンか…。

「はははっ。びっくりしただろー？ちなみに俺も見たとき、すげー
びっくりしたから。」

嬉しそうなミヤマの声が聞こえる。

「あーっ。びっくりしたー！」
ちよっと手が震えた。

そこにはマネキン（♂）が横たわっていた。

「なんだよ！誰だよ！こんなの捨てるの！」

「…っ！か、この為に連れてきたのか？」
僕は振り返ってミヤマに聞いた。

「いやいや、メインはこれじゃないんだ。」
ちよつとだけミヤマの顔つきが変わった。

「えっ。まだなんかあるの？」

「そのマネキンの下。」

「した？」

マネキンの下って……？した？地面？

「そう、この下。」

ミヤマがマネキン（♂）を足でどかした。

「何もないじゃん。」

「掘ってみ……。」

「えーっ。掘るのかよー。」

めんどくさくなった僕は、その土を足で蹴りながら掘った。

「ん？なにこれ？」

土の中に黒いゴミ袋が見えた。

「おっ。やっぱりまだあった！それ開けてみ。」
またミヤマは嬉しそうにした。

そういえば、黒いゴミ袋なんて最近見ないな…。

僕は呑気にそんなことを考えながら、それを手に取った。

ゴミ袋は結構な重さだ。中には白い紙袋が入っていた。

今度は紙袋を手取る。

そこで一旦ミヤマの顔を見てみた。

ミヤマは何も言わずニヤニヤしている。

僕は紙袋の中に手を入れた。

硬くて冷たいモノが手に触れる。

とりあえず取り出してみた。

……なにこれ…？拳銃？ピストル？本物…？？？

「どう？どう？」

ミヤマの声がした。

「いや、どうって。どうなんだろ…。」

僕はピストルを手にとって、何故か冷静になっていた。

「何だよ。リアクション悪いなー。」

「いや、これはリアクションとりづらいつて。」

「俺なんか『なんじゃこりやー!』って感じたのに。」
ミヤマがモノマネつきで言った。(似てない)

「いや、でも、何これ…? 誰の…?」
僕はまだ理解できなかった。

「んー。知らん。たまたま見つけた。」

「本物か?」

「知らん。本物とか見たことないし……。」
僕につられたのか、ミヤマのテンションが下がる。

「で、これをどうしろと……?」

「んー。どーでしょう?」
今度はミスター口調のミヤマ。(これも似てない)

「いやいやいやいや、ミヤマが見つけたんだから、自分でどうにかしろよ。」

「えー! つーか、どうすりゃいいのかわからん。」

「やっぱり、これは警察だろ。けーさつ! お巡りさん!」

「えーなんかー、そーゆーの、めんどくさいしー。」

こいつはギャルか…。

「だって、本物だったらマズイだろう!」

「やっぱり、お前は真面目だなー。」

「いやいや、これはマズイって!」
とりあえずピストルをミヤマに差し出す。

「じゃあ、お前が警察に持って行ってくれ。」
ミヤマがピストルを僕に押し返しながら言う。

「えっ!……それはヤダ!」

「なんでー!お前が警察行けって言ったじゃん。」

「とにかく、ミヤマが見つけたんだから、ミヤマが行くべきだ!」

「んー…。じゃあ、お前これ持って帰れ。」

「バカ!持って帰ってどうすんだよ!」
さすがの僕もこれには呆れた。

「いいじゃん。こんなのなかなか手に入らないぞ。」
ミヤマがピストルを僕の手から取って言った。

「こんなの持ってたら捕まるって。」

「いいじゃん。警察の人だって持ってるし、なんか『正義の味方』みたいな感じで……。」

「ちよつとは真面目に考えろよ!」

「うーん……。」

ミヤマがピストルをまじまじと見つめている。

なんか嫌な予感がした。こいつ変な事言いそう……。

「安西先生、ピストルが撃ちたいです……。」

…やっぱり!!

「ダメ!絶対ダメ!洒落にならん。」

「撃つてから元に戻せばいいじゃん。」

「やめとけて。バレたらほんとに洒落にならんから。」
僕はミヤマに手を差し出す。

「絶対バレないと思うんだけどな!。だいたい本物じゃないかもしれないし……。よくできたオモチャかもよ。」

そう言いながらも、ミヤマは素直にピストルを僕に返した。

「本物だったらどうするんだよ。絶対に銃声とかでバレるって。だいたい警察官だって、そんな簡単に撃てないんだぞ。」

「そんなのピストルで自殺する警察の人とかいるじゃん。それに比べりゃかわいいもんだろ。」

「……そういう事は言っちゃダメだって。」

…ダメだ。あんまり長くしゃべっていると、こいつは本気になる。

「そういうお前は撃ってみたくないのか？」

「全然！！とにかくこれは元に戻そう。こんなの見なかったことにしよう！」

僕はそう言いながらピストルを紙袋とゴミ袋に戻した。

「とりあえず、忘れよう。何も見てない。なっ？」

ここは強気にいかなきゃ…僕はそう思っていた。

僕はゴミ袋を土の中に戻し、その上に足で土をかぶせる。

「なんかつまらん。」

ミヤマは子供みたいに口を尖らす。

「まあ、いいじゃん。これが一番いいんだって。」

僕は最後にマネキン（♂）を元の位置に戻した。

「よし、じゃあ帰ろう。もういいだろ。」

「まあ、お前の言う通りか…。しょうがないかな……。」「

こいつ、テンション低っ！！

まさしく、とぼとぼと自転車に向かうミヤマ。
その後ろから僕も自転車に向かって歩いた。

……なんか疲れた。

まあいいや。さあ、帰ろう！！

あんなのは僕達には関係のないモノだ！！

そして、僕達は自転車に乗り、それぞれの家に帰った。

——その夜、僕は夢を見た。

僕は保安官だ。

街の荒くれ者達を自慢の銃で撃ちまくる。

誰も僕を止められない。

僕は銃を撃ちまくる。

僕は正義の味方だ。僕が正義だ。

僕は銃を撃ちまくる。

正義の名のもとに――

次の日の朝、僕はご飯と味噌汁をガッツリ食べて、いつも通り学校へ向かった。

「おい、聞いたか？」

いつもの様に、加藤がでかい声で話しかけてくる。

「ゆうべ、川の近くで発砲事件があったらしいぞ！」
今日も加藤はテンションが高い。

「ふーん…。」

「今朝のニュースでやってただろ。ヤクザが病院に運ばれたって。」

「知らね…。つか、あんまりニュースでヤクザとか言わないだろ。」

「お前は、なんでそんなにテンションが低いんだよー。」
加藤はそう言つと、また次の相手を探しに行った。

あれ？…川の近くで発砲事件って…いや、まさか、あれは関係ないだろう。

そう思いながらミヤマを探したが、見あたらない。

遅刻か…？まあいいか。

結局、その日ミヤマは学校に来なかった。

僕は気になって放課後ミヤマの家に行ってみた。
ミヤマの家に行くのは中学生の時以来だ。

マンションのエレベーターに乗りながら、別に電話でよかったかな
……などと考えている。

まあ、いいか。

僕は薄茶色のドアの前に立ち、インターホンを押した。

「……はい。」

髪の毛ボサボサでスウェット姿のミヤマが出てきた。

「あ、ミヤマ。」

僕はすんなりとミヤマが出てきたので、少し驚いた。

「おう、どうした？」

少しダルそうな声でミヤマが言う。

「あ…、いや、えーと。今日、休んだから。」

「え…？あ、そうか。いや、なんか風邪ひいたっぽい。」
ミヤマは不思議そうな顔をしている。

「ふーん……。」

あれ？僕は何しに来たんだっけ？

「で、どうした？何か連絡か？」

「……あ、いや。………忘れた。」

なんだ、これ。僕は何してるんだろう。

「ちえつ。なんだよ、それ。」

ミヤマは小さく舌打ちをしてから言った。

「まあ、いいや。思い出したらメールでもしてくれよ。」

「うん。あ、明日は学校来るのか？」
こんなこと聞いてどうする。

「え、ああ。まあ、行けたらな。」

相変わらずダルそうなミヤマ。

「そうか。じゃあ、帰るな。」

「おう。じゃあな。」

ミヤマは軽く手を振った。

——ほんとに僕は何をしに来たんだろう？

発砲事件の事や、ピストルの事。それに、学校を休んだ事——僕はミヤマにいろんな事を聞きたかったのに、言葉がうまく出てこなかった。

日も暮れかかった頃、僕は一人であの場所に行ってみた。

マネキン（み）がまだ横たわっている。

僕はそこでいろんな事を考えていた。

確かめてどうする？

あつたらどうする？

なかったらどうする？

——結局、ピストルを確認するのはやめた。

結果はどうであれ、僕の明日は変わらない。

そつだ！明日からまた普通に生きるだけだ！

僕はマネキン（♂）のそばに転がっていたバットを蹴飛ばし、自転
車に向かって走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2117g/>

チョコレートメキシコ

2011年1月5日03時13分発行